

相応寺〔むかしは伽藍巍々たり。三代実録、類聚国史に見ゆ、後世頽廢して今離宮八幡の東南に小堂あり、薬師仏を

安ず、土人新堂といふ〕

土佐日記　かくてさし登るに、東のかたに山のよこほれるをみて人にとへば、八幡の宮といふ。これを聞てよろこび

て、人ごとにおがみたてまつる。山崎の橋見ゆ、うれしき事かぎりなし。こゝに相応寺のほとりにしばし舟をとめ

て、とかくさだむる事あり。此寺の岸のほとりに、柳おほくあり、ある人此柳かげの川の底にうつれるをよめる歌、

さゞれなみよするあやをば青柳の陰のいとしてをるかとぞみゆ

今昔物語　山崎に相応寺といふ寺あり、其寺に壹演といふ僧住けり。此本は俗也内舍人大中臣正棟とぞ云ける、奈良

の西の京にぞ住しが、道心発して出家して後、池辺の宮と申ける人の弟子として唐に渡る、真言を受習して法を修

行する事不<sub>レ</sub>愚、帰朝して後彼相応寺に住して真言の行法を修す。

むかしも今も、遊女の歌は世々の撰集にも撰れ、高位にまじはる事もありしにや。十訓抄といふ書に、都て芸能につけ

て望をとげ賞を蒙るもの古今数をしらず、あやしの賤の女あそびくゞつまでも、郢曲に勝れ和歌を好むともがら、よき

人にもてなされ撰集を汚す。其ためしあまた聞ゆる中に、亭子帝〔宇多院〕鳥羽院にて御遊有けるに、とりかひと云事

を人々よませられけるに、あそびくゞつあまた参集れり、其中に歌よく諷ひて声よき物をとほるゝに、丹波守玉淵〔参

議音人の子〕が娘に白女と申せり。帝御船にめしのせて、玉淵は詩歌にたくみなりしものなり、そのむすめならばこゝ

の歌をよむべし、さらばと仰らるゝに程もなく、物の名とりかひを、

ふかみどりかひある春にあふ時は霞ならねど立のぼるかな  
白 女

此とき帝ほめあはれみ給ふて、御うち着一重を給せけり。其外上達部四位おのゝきぬぬぎて、かづけければ二間ばかりに積あまりにけりとなん。同女源実つくしへまかりける時、山崎にて別れを惜ける所にて、

命だに心に叶ふものならば何かわかれのかなしからまし  
白 女

とよめりける、後に古今集にいれり。しかのみならず、肥後国の遊女松垣の姫は後撰集に入、神崎の遊女宮城は後拾遺集を穢す、青墓の傀儡名曳は詞花集をゆり、江口の遊女妙は新古今の作者なり。これらの故実あれば、世々の撰集に入雲の上にもまじはるとぞ聞へし。

わするなり契し春は夢なれやねざめとひ来る初雁の声  
遊女 大 橋

宿かろといふ僧もなきしぐれかな  
同 十 市

吉野さぞ郭あたりの花菜さへ  
同 小 紫

入定の日ともしらずに紋日かな  
同 瓜 生 野

をとこなき寢覚はこはい蚊帳哉  
同 花 咲

宵くの待身につらき水鶏かな  
同 若 京

都林泉名勝図会五之卷大尾